

中級クラスにおけるビジターセッション

－実践例と課題－

宮崎 幸江・鈴木 庸子

1 はじめに

2003年から2005年にかけて、日本語4 (Japanese 4, 以後J4) および集中日本語3 (Intensive Japanese 3, 以後I3) の話し合いのクラスにおいて、ビジターセッションを行なった。ビジターセッションとは外国語教育の中で当該学習言語の母語話者を教室に招き、直接のインターアクションをめざす授業を指す (横須賀 2003)。

本稿は数回の実践を通して定型化してきた方法を紹介しつつ、実際に行なった工夫や今後改善すべき点について述べる。

2 実践報告

コース概要：日本語4 (J4) のコースは、週10コマ、『ICU中級日本語1』を教科書として用いた。集中日本語3 (I3) のコースは、週20コマ、『ICU中級日本語2-3』を教科書として用いた。

対象：学習者のレベルは中級レベル、クラスのサイズは8名前後で、学生の出身国がヨーロッパ、アジア、北米、アフリカと多様な場合と比較的学生の出身が集中している場合があった。

ビジター募集：ビジターの募集は主に次の3通りの方法で行なった。

- 1 国際週間^{*1}に一度ビジターとして来た学生のアドレスを控えておき、メールで参加希望者を募る。
- 2 ICUのウェブサイトでその都度募集する。
- 3 5月の新入生リトリートの際に、JLP ビジターセッションを紹介し、興味のある学生を募る。

その他、教員の個人的なネットワークを通じての募集も行なった。募集の時期はできるだけ早めに行なう方がビジターの確保がしやすいので、クラスの曜日時間帯が決まった時点で行なうのが理想的だろう。ビジターへの連絡事項は、教員のホームページ^{*}も利用し、コースの説明、ビジターセッションの内容、ビジターセッションのスケジュール、参加に当たっての注意点を事前に理解してもらうように努めた。(日本語母語話者の学生に対しては、呼称として「ビジター」のかわりに「会話ボランティア」を用いている)。 ^{*}<http://subsite.icu.ac.jp/people/suzukiyo/vsessions.html>

ビジターへの連絡（例）

会話ボランティアのみなさんへ

- * このサイトは会話ボランティアのみなさんへの連絡のページです。
- * Intensive Japanese 3（集中日本語3）のコースでは、ビジターセッションという授業を設けています。この授業では、日本語母語話者のみなさんに授業に参加してもらい、いっしょにグループディスカッションをしたりスピーチを聞いて質問や意見を述べてもらいます。参加してくださる日本語母語話者のみなさんを「会話ボランティア」と呼んでいます。
- * 「会話ボランティア」として、ビジターセッションに参加したい方は、JLP 鈴木庸子までご連絡ください。準備していただきたいことなどをご連絡します。また、以下をよく読んでおいてください。
- * Intensive Japanese 3（集中日本語3）のコースについて
このコースは、中級の後半3分の2をカバーするコースです。学生数は17名で OYR, 4 YR, 大学院生、研究生がいます。英語教育で言えば、高校2, 3年生で勉強するぐらいのレベルだと思います。
- * 留学生と話すときの注意：あまりありませんが、日本語の授業なので、英語を使わないでください。もしわからなかったら、ゆっくり言う、やさしい言葉で言い換える、絵をかいて説明する、などの方法があります。それでも苦しかったら、単語のレベルで英語を使ってください。聞かれたら、単語でも文法でも教えてあげてください。困ったら私を呼んでください。
楽しんでいただけたらうれしいです (^o^) /

授業例：典型的な学習の流れを図1に示す。学習者は教科書で読み、プレタスクで自分の考えを書き、ビジターセッションでは自分の考えを述べ、他の人の話を聞いて質問したり、進行役を務める機会もある。ビジターセッションは教室活動に欠ける部分を補う総合的な教室活動の仕上げと位置付けられる。

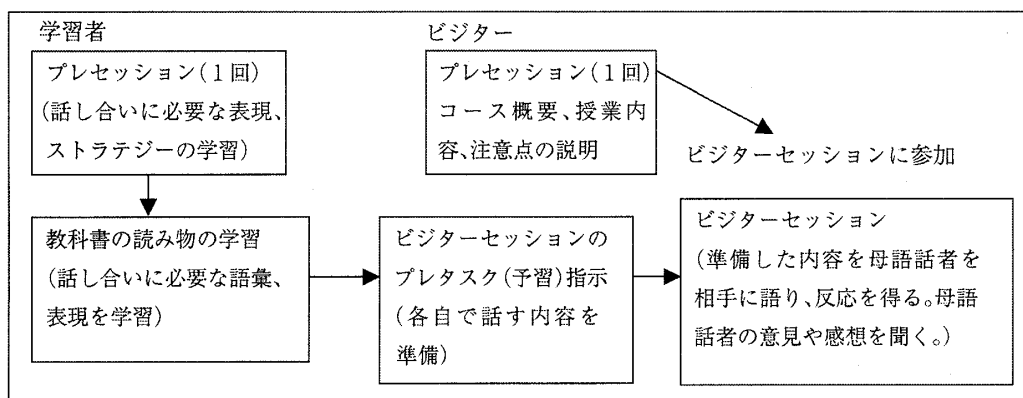


図1 学習の流れ

表1は、話し合いクラスのトピックと教科書の内容の関係、プレタスク（予習）の内容をまとめたものである。ビジターセッションの話し合いと教科書の読み物を関連させると、学習者は教科書のトピックについて語彙表現を学習済みなので、ビジターセッションでは内容に集中しやすくなる。

表1 教科書の課と話し合いのトピックおよび内容

教科書の課など	話し合いトピック	プレタスク（予習）の内容
「アルバイト」 ICU 中級日本語1 補足第1課	アルバイト	①どんなアルバイトをしたことがあるか ②そのアルバイトを通して何を学んだか
「カルチャーショック」 ICU 中級日本語1 補足第3課	カルチャーショック	①外国人と生活するときが一番大切なことは何か。 ②日本に来て、おどろいたことは何か。
黒柳徹子「窓際のトットちゃん」 ICU 中級日本語1 第5課	理想の教育	①今まで習った印象に残っている先生、理由、エピソード ②もう一度生まれ変わったらどんな学校に行きたいか。 今の大学生活に満足しているか、なにが問題か。
「先生できたよ」 ICU 中級日本語2 補足第1課	理想の教育	①あなたの国の教育制度について説明してください。 ②あなたの行った小学校で同じクラスに心身に障害のある生徒がいたことがある。 ③理想の教育とはどんな教育だと思うか。
「東京のイメージ」 ICU 中級日本語2 補足第2課	東京のイメージ、 偏見	①日本に来る前に持っていた東京のイメージ。そのイメージはどこから来たか。東京に来てどう変わったか。 ②クラスメートの出身国に対して持っていたイメージ、理由、そのイメージは正しいか。
「だんらん失う悩み」 ICU 中級日本語2 補足第2課	しつけ	①日本の親は子どもにどんなしつけをするか。 ②子どもは家族との食事を通して何を学ぶか。 ③食事のみだれと社会の余裕。
「天声人語 道草」 ICU 中級日本語3 第3課	人生の道草	①過去に経験した人生の道草。何を、いつ、どの位の間にしたか。理由、学んだこと。 ②将来してみたい道草。
「茹玉子」 ICU 中級日本語3 第1課	食べ物の思い出	①忘れられない食べ物、理由、思い出、今も好きか。 ②あなたの国の行事に関係ある食べ物、作り方、食べ方
「動物のサイズと時間」 ICU 中級日本語3 第12課	時間の概念と文化	図2 参照
好きな本、映画、音楽 教科書なし	趣味	①自分の好きな音楽等について、いつから好きか、その理由を説明する。 ②似た趣味の人をクラスで見つけ情報交換。
星新一「おーいでてこーい」 短編小説	ゴミ問題 東京と自分の国	①東京のゴミ問題（武蔵野市と川崎市のパンフレット比較） ②自分の国とどう違うか比較。

プレセッション：可能な場合は実際のビジターセッションの前にビジターを集め、クラスの内容説明、ビジターの役割、クラスへの参加方法について、プレセッションを行なった。その際にビジターセッションへの参加は任意ではあるが、JLP の学生にとっては授業の一環であるので、責任を持って参加するように言い添え、急に来られなくなった場合の連絡方法等も前もって決めておく。直に会ってプレセッションを行なうことが無理な場合は同様の内容をメールで連絡する。

JLP の学生に対するプレセッションとしては、話し合いの仕方を練習する。毎回、司会（グループ内進行係）、書記（グループで話し合った内容を記録）、発表者（グループごとに発表する時の代表）を決めさせ話し合いを行なうので、それぞれの役割と必要な表現、言い回しを事前にクラスで取り上げて練習しておく。役割は日本人ビジターも含めて分担するが、役を決める際の交渉の仕方も練習しておくことスムーズに行く。

プレタスク：学習者とビジター双方にプレタスクを与え予習または準備を促した。実際の話し合いのクラスもプレタスクの質問に従って行なう。プレタスクの内容、量は何度か同じトピックでビジターセッションを行なった結果、以下（プレタスクの例：「時間と文化」）の型がやり易いことがわかった。

「動物のサイズと時間」話し合い

a. 次のトピックについてクラスで話す内容を考えてきてください。

- ① あなたは日本人はせっかちだと思いますか。どんな時そう感じますか。
それはなぜだと思いますか。
- ② 時間がない生活について考えてみましょう。時計のない生活のよい点不便な点をあげてください。
- ③ あなたの国の文化には時間に関する共通の文化がありますか。あるとしたら、それはどんなものですか。

b. 準備すること：話す内容について、メモを書いてきてください。メモは先生に提出してください。

ビジターのみなさんへ：

JLP の学生は次の本文を読んで勉強してきます。時間があったら読んで

おいてください。「動物のサイズと時間」本川達雄

<http://subsite.icu.ac.jp/people/suzukiyo/Intensive3/doubutsu.pdf>

プレタスクを作る際は、次の 4 点に注意するとビジターセッションが興味深く活発なものとなりやすい。

プレタスク作成のポイント

1. プレタスクの問いは抽象的な問いを避け、できるだけ具体的な答えを用意できる問いにする。
2. トピックに関わらず、ビジターを交えての話し合いが異文化理解につながるような設問に

する。

3. 個々の学習者が個人的な体験や考えを語るができる質問にする。
4. 70分クラスの場合、2～3問のプレタスクが適当。

プレタスクは教科書の一課が終わる日に課題として与える。書いてきたメモは宿題として提出させる。ビジターも、学生に配付するのと同じプレタスクを事前にウェブで確認するようプレセッションで指示しておく。

授業の流れ：ビジターセッション当日、学生はビジターとは教室で直接会うことになる。教師はあらかじめ、当日のグループ分けについて計画をたて、休み時間の内に席をグループごとにまとめておいた方がよい。ある程度ビジターが揃ったところで、手短かにその日の内容について確認し、先にビジターを各グループに配置してから学生とマッチングする。通常ビジター1人に対

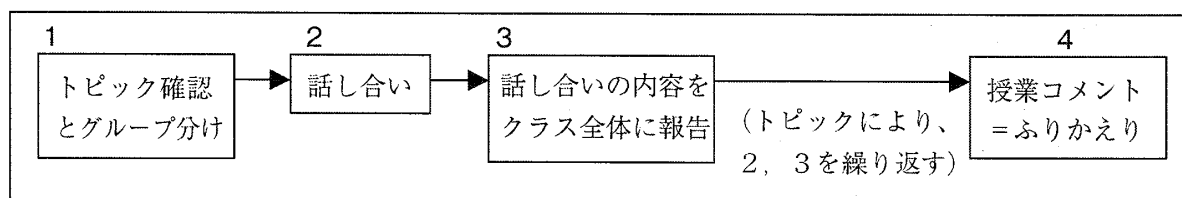


図3 一コマの授業の流れ

し学習者2～4人が妥当だと思う。グループは、できるだけ出身が同じ人にならないよう配慮すると話し合いが少しでも現実味を持つ。

ビジターが遅刻してきた場合は、予め用意している席で待たせタイミングのよいところで新しいグループを作る。注意すべきことはグルーピングやマッチングに手間取り無駄な時間を費やさないことである。できるだけ手際よく行えるよう臨機応変な対応をする。

70分クラスの場合、休み時間の教室入れ替え等も含め正味クラスの時間は65分程度と考える。毎回、最初の5分程度であいさつ（自己紹介）、役割（進行係、発表、書記）を決める。そして、宿題の最初の問題について、話し合いを始めさせる。授業の流れは話し合いの内容によって、話し合いの進行には大きく二つのやり方がある。一つはグループ内で一人ずつ考えを順に述べる方法、もう一つはペアを組み、お互いに自分のことを話し、数分おきに何度かペアを変えて同じ話を違う相手に話す方法である。その場合、数回相手を変えた時点でグループに組み直し通常の話合いのスタイルに戻る。

前者のスタイルは話題が「時間の概念と文化」のように一般的な常識を問うようなものの場合に適當である。日本人の時間の概念を留学生の立場からどう観察しているかについて話した後、各国の時間の常識を比較し合う。後者のスタイルは、トピックが「人生の道草」や「カルチャーショック」などのように個人の体験の時に適している。個人的な話の場合聞き手から直接反応が得られるペアの方が、話しやすいだけでなく、聞き手を変えて何度か同じ話をする内にスムーズにかつ正しく話せるようになる。いずれの場合も、約15分後には一旦クラス全体に話し合いを

戻し、発表者にそこまでの話し合いの内容を中間報告させ、後半のグループでの話し合いに戻すなど、セッション参加者全員が様々なインターアクションを経験できるよう相手や役割を変えて話をさせることが重要である。

授業コメント＝ふりかえり：毎回授業の最後 5 分から 10 分程度を授業を振り返る時間とする。参加者全員に紙を渡し「今日の授業で学んだこと、面白かったこと、難しかったこと、その他のコメント」について書いてもらう。この作業は、その時間に話したり聞いたりしたことをもう一度振り返って日本語で表現することにより、学習した表現の定着をはかることができると共に短時間に日本語で考えをまとめて書く練習となる。コースの始めのころに比べ、ふりかえりも回を重ねるごとに学生も作業に慣れ書くスピードや量が明らかに変化していく。ふりかえりは教師にとっても授業の進め方や、課題の内容や量が適切であったか等を反省する材料とできるので有効だ。さらに、ビジターのふりかえりから、ビジターセッションが学習者だけでなくビジターにとっても貴重な学びを提供できることがわかる（宮崎・鈴木 2006）。

教室運営：ビジターセッションを成功させるポイントとして、以下の 3 点を挙げたい。

- 1 教師はファシリテーターとなる
- 2 グループ分けへの配慮
- 3 くり返し行なうことの意味

当日の教室運営の第一のポイントは教師がファシリテーターとなることである。教えるのではなく、学習者とビジターが共に学びあう場と雰囲気を作ることが重要である。たとえば、不馴れなビジターが難しすぎる語彙を使っている場合等は、教師がそのことを指摘するのではなく、聞き返しやくり返しを使ってビジター自身に言い直す機会を与えると、ビジターは自分の語彙が学習者にとって難しすぎたことに気付き、語彙レベルを調整することができる。また、そのやりとりを見た学習者もコミュニケーションが上手くとれない場合に自力で解決する方法を学べる。

第 2 に教師は常にグループメンバーの発話量を観察し、グループを分ける際に、できるだけ一人一人の学生がビジターと直接インターアクションが持てるようにグループを分ける。同じレベルの学生でも会話力、聴解力に大きなレベル差があることも少なくない。聴く力が弱く、引っ込み思案な学生はクラス全体でディスカッションを行なうと、なかなか発言の機会が得られないが、グループに分けると、平等に話す機会が与えられる。最初のうちは、同じグループになるべく似たような会話力の学生を入れるなどの配慮が必要だ。

第 3 に可能なら同じビジターがくり返し参加できることが望ましい。同じメンバーだと、自己紹介などを省略でき、ビジター自身、外国人と日本語で話すことに慣れてくる。話し合いの進め方、言い換えや聞き返しなどのストラテジーも上達するため、同じ時間内で効率良く話し合いを進めることができ、内容の深い話し合いが可能になる。

最後にビジターにより、教室内に接触場面（ネウストプニー 1995）を設けることの効果について言及しておきたい。2005 春学期 I3 で、ほぼ同じ内容の話し合いクラスをビジターなしで行

なった。授業としてはまとまりのある、教師にはコントロールのしやすい授業を行なうことができた一方、すべての手順は先に述べた 2004 冬学期と同じであったにもかかわらず、学生の学習動機を維持することが難しかった。集中クラスで 3 学期目の春学期ともなるとお互いのことはほぼ知り尽くしており、改めてお互いの国や文化について語ることに必然性も新鮮味も感じないことが原因と考えられたため、学生の希望を聞いて、ビジターセッションを設けたところ、学生の態度、動機づけに大きな変化があった。

3 課題

ビジターセッションを実際に運営するためには、制限や問題もある。以下に授業評価、初級レベルの場合、話し合い以外の授業の場合、ビジターの手配の 4 つの観点から、今後の課題を述べておきたい。

授業評価：ビジターセッションの問題として、授業評価、誤用の訂正の方法が考えられる。確かにビジターセッションにおいて、教師は他のクラスに比べ適切なフィードバックを与えることが制限される。しかし、ビジターセッションの目的は学習者が授業の中で日本語母語話者と自発的に会話をし、日本語を使うことにあるので、誤用訂正を含むフィードバックに関しては文法項目を学ぶ場合とは異なってもよいと筆者は考える。むしろ、形ではなく話し合いの内容に関するフィードバックを重視し心掛けた。また、ビジターセッションの授業評価は毎回学習者とビジターの双方にふりかえりという形でコメントを書かせ、彼等の学びの質とクラスへの参加度を観察した。成績のための評価としては、授業の準備と参加のほかに、ビジターセッションと関連する内容を口頭試験に入れる、作文の題材として使う方法等も考えられる。

初級レベル：1995 年の初の JLP/ELP ジョイントセッション（鈴木・島崎 2002）やビジターセッション（横須賀・村上 1995）は中上級レベルで行なわれてきた。教室言語を日本語のみにする場合、中上級レベルならビジターセッションを取り入れることはほとんど問題がない。では初級レベルでビジターセッションを行なう場合はどうであろうか。プレタスクの内容、クラス内の言語（言語レベルのコントロールや媒介語の使用）など様々な面で工夫が必要になるが、ネウストプニー（1995）も指摘しているように やり方次第ではどのレベルでもビジターセッションは可能であり、学習効果は期待できるとの印象を持った。事前の準備（ビジターへのプレセッション）を含め、効果的な授業の運営を考えていくことが今後の課題である。

話し合い以外のクラス：ビジターを日本語クラスに取り込む方法は、話し合い以外のクラス形態では、プロジェクトの発表やスピーチの聞き手、スキット大会の審査員等が考えられる。一般的ではない方法では、読解（副教材、速読）のクラスでわからない言葉や表現について辞書を使わずにビジターに尋ねながら読むという方法でビジターセッションを行ったり、作文のブレンストーミングにビジターを活用する方法も考

えられる。審査員として参加する場合、ビジターはコメントを述べたり評価することが主な役割となり学習者との直接的なやりとりはあまり期待できない。一方、読み物や作文の前作業への参加はやり方次第で学習者が考えていることを声に出して表現し、その過程に母語話者が関わるので両者の間に相互的なやりとりが行なわれる。ビジターセッションはビジターとなる人がいればどのようなクラスでも可能であるし、教育的効果も期待できる。

ビジターの手配：ビジターの募集と手配は思いの他手間を取る仕事でもあるためなるべく合理的な方法を開発する方が望ましい。現在のところ、ヘッドの教員がビジターの手配、管理を全て行なっているが忍耐と労力を要する。大学構成員の間でJLPのビジターセッションについて周知徹底し、スケジュールや応募方法のための専用の掲示板が用意されたり、サマーコースのようにビジターの手配になんらかの助けが得られたりすれば、より効率がよくなることは間違いない（鈴木2006）。この点については今後の改善が必要であろう。

4 おわりに

本報告は中級話し合いクラスにおけるビジターセッションの運営について実際に行なった方法を紹介しつつ、実践から得た知見と課題について述べた。JLPにおけるビジターセッションはICUという環境でのみ可能なユニークな授業形態であり、JLP 学習者、ビジター学生双方にとって教育的価値は高い（宮崎・鈴木 2006）。今後、様々なレベルの学生がビジターセッションを通して日本語で互いの文化を学べるよう、多様なビジターセッションの方法が開発され共有されることを期待したい。

注

1. 国際週間 2003 年度に始まった全学的な企画で、大学構成員の国際理解を深めることを目的に講演会、交流会、語学課程のビジターセッションなどが組まれている。2003 年度、2004 年度、2005 年度は学生による JOYNT というサークルがビジターセッションの運営と調整にあたり、英語教育課程と日本語教育課程の双方でビジターセッションを実施した。ウェブサイト上への案内もこのサークルが手配した。

参考文献：

- 宮崎幸江・鈴木庸子（2006）「JLP における接触場面としてのビジターセッション- 日本人ビジター・留学生は何を学んだか-」『ICU Language Research Bulletin vol. 21』37-49 頁
- ネウストプニー[Neustupny], J. V. (1995) 『新しい日本語教育のために』 大修館書店
- 鈴木庸子（2006）「2005 年度夏期日本語教育 教務主任報告」『ICU 日本語教育研究 2』
- 鈴木庸子・島崎美登里（2002）「JLP と ELP による国際交流授業- 討論とグループ・プロジェクトの試み-」『ICU 日本語教育研究センター紀要 11』69-78 頁
- 横須賀柳子（2003）「ビジター・セッション活動の意義とデザイン」 宮崎里司、ヘレン・マリOTT 編 『接

触場面と日本語教育- ネウストプニーのインパクト』335-352頁.

横須賀柳子・村上恵 (1995) 「ビジター・セッションを組み込んだコース・デザイン」『ICU 夏期日本語教育論集 11』154-176頁.

使用教科書

『ICU 中級日本語 1、2、3』(2001 試用版) 国際基督教大学